



18 菊貼付花瓶  
19 菊貼付香炉

一点  
一对

十二代沈壽官

明治二十六年(一八九三)

陶磁

(右の花瓶) 径二四・七、高四一・三

(左の花瓶) 径二三・九、高四〇・五

(香炉) 径二二・七、高三七・八

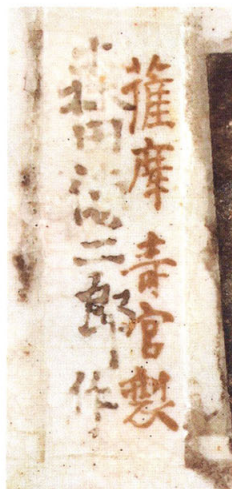
作品番号18、19は十二代沈壽官(一八三五〜一九〇六)による花瓶一对と香炉一点からなる一組の薩摩焼の作品。香炉のみ蓋(火舎)が付くが、三点とも前後が扁平な扁壺形をしており、胴を中心に首から裾にかけて菊の花が埋め尽くしている。器の表面には細かな籠目が施され、全体の意匠として花籠を表わしていることがわかる。籠目は型による成形ではなく、一つ一つを彫刻しており、薩摩焼に特徴的な白い素地を見ることが出来る。菊花も同様に個別に作って器の表面に貼り付けており、いずれも花弁の大きさや形状の違いから型抜きしたものではないことがわかる。三本の脚部はちょうど菊の折枝を紐で束ねた部分で表わしており、葉と紐の房が底裏まで再現されている。この見事な彫刻をさらに現実感豊かにしているのは、赤、黄緑、ピンク、紫、白などを使った鮮やかな色絵と、花や葉だけでなく籠目にもふんだんに施されている金彩である。

これまで、香炉にある金彩銘「薩摩壽官製」から十二代沈壽官の作品として知られてきたが、花瓶の方に沈壽官の金彩銘の他に「森田徳二郎作」の彫銘が見出されたことから、本作の彫刻、あるいは成形に関して陶工・森田徳二郎が関与していることが明らかになった。なお、宮内公文書館が所蔵する明治期の宮内省に関する購入書類から、本作は宮殿裝飾用として宮内省の依頼を受けて明治二十六年(一八九三)に制作されたことが判明しており、納品後は明治宮殿南溜の間のマントルピースに飾り置かれた。





香炉部分



花瓶底裏の銘



花瓶の脚部底面



- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

## 明治美術の一断面——研ぎ澄まされた技と美

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 82

編集 宮内庁三の丸尚蔵館  
制作 株式会社 東京美術  
翻訳 黒川廣子  
発行 宮内庁  
平成三十年十一月三日発行

© 2018, The Museum of the Imperial Collections, Sanmomaru Shozokan